

札幌市立屯田北小学校の取組

(学校ホームページ <http://www.tondenkita-e.sapporo-c.ed.jp/>)

1. 学校の実態・地域性等

本校は、札幌市北部に位置し、日本海側から入り込む偏西風の影響で冬期間の降雪量が多い。家庭では除雪に追われることも多く、雪と親しむという感覚は子どもにもあまりないように思われる。実際、冬期間になると外で遊ぶ子どもはあまり多くは見られない。また、スキー場から離れていることもあり、スキー経験が豊富な子は少ない。

そこで、本校では「雪の学習活動」を教育課程に位置づけ、低学年では「とんきた雪まつり」の開催、中学年では「防風林の雪探検」の学習、高学年では「冬の滝野宿泊学習」を通して、雪と親しむ機会を設けている。



2. 実践単元名

2年 生活科 「とんきた雪まつり」 (9時間扱い)

3. 目標

- 自分たちで開催する「とんきた雪まつり」に関心を持ち、みんなで楽しもうとしている
(生活への関心・意欲・態度)
- 幼稚園児を招待して楽しんでもらえるような工夫を考え、表現している。
(活動や体験についての思考・表現)
- 雪国のよさを実感し、みんなで雪を楽しむことができる。
(身近な環境や自分についての気付き)

4. 取組の様子

① 雪と親しもう！「雪遊び」

「雪が大好き！」という子どもばかりではない実態がある。雪は冷たいから嫌だ、寒いから外に出たくない、スキーは楽しくない…という子も多い。このような児童の実態は保護者に影響されているところも強く、家庭で雪に対するネガティブな意見を毎日のように聞くことで、子どもも雪に対してあまりいいイメージをもたないのである。

2学年としては、まず、雪に親しむことに時間をかけ、友達同士で楽しさを実感していくことを大切にしたい。休み時間に「雪遊び」のため外へ積極的に出て、雪だるまを制作したり、雪合戦をしたり、雪面に体のあとをつけたりするなど、雪とふれあう経験を十分に行った。これらの活動により、「今日の雪は軽いね」「雪玉がつくりやすいね」など、雪に対する見方が広がっていった。特に子どもたちが感動したことは、「雪の結晶観察」であった。雪の結晶を直接見るのは初めてという子がほとんどで、「雪ってこんなにきれいなんだ！」と雪への関心を高めていった。



② 雪って楽しいな！教えてあげよう、幼稚園の子たちに！

雪への関心を高めた子どもは「もっと雪で遊びたい」と話すようになり、「雪まつりをしたい！」という子どもの声から、活動を行うこととした。どんな目的で雪まつりを開くか話し合う中で、子どもの「2学期に交流した幼稚園の子どもたちを招待したい！」という意見を基に、「とんきた雪まつり」を開催することとした。

「どんな雪まつり」にしたいかを、子ども同士で話し合い、計画をたてることにした。雪像作りは1人の力では難しく、仲間と協力することが不可欠である。そのため、教室では協働的に話し合い、学ぶ場を積極的に取り入れた。また、学年全体で取り組むことにしたので、各クラスの計画について互いに考えを交流するため「プレゼン大会」を行い、2年生なりに、どんな雪像を作りたいかを提案した。



③ アイスキャンダルに挑戦しよう！

子どもたちの計画の中に「アイスキャンダル作り」があった。これは、本校のミニ児童会館が毎年行っている活動であり、それを覚えていた子が「僕たちも挑戦してみたい」と訴え、「とんきた雪まつり」にアイスキャンダルが登場することになった。

バケツやキャンダルについては建設局雪対策室に用意していただき、児童が1人1個のアイスキャンダルを作ることができた。用務員さんに手伝ってもらいながら、バケツを運び、並べる子どもたち。「水は凍る」ことを知っているのだが、一日たってもなかなか凍らないことに驚く子どももいた。氷点下にならないと凍らないという事実を知らない子どもたちは、アイスキャンダルづくりを通して気温と水の関係に目を向ける貴重な経験を積むことができた。



④ 雪像作り

雪像作りで大切にされたことは「相手意識」である。「自分たちが遊びたい」、「自分たちが楽しい」ということだけでなく、「幼稚園のみんなが楽しめるように」というおもてなしの気持ちを大切にしながら取り組んだ。雪像作りを進める中で、固まりやすい雪や、固まりにくい雪、水を使うとくっつくなど子どもなりに雪の性質に気づきながら、作業を進めていく姿が見られた。



4～5人のグループごとに雪像作りに取り組んだが、互いのグループの作品を相互評価する場面も取り入れた。自分たちだけの作業ではわからないことが、他のグループとかかわりをもつことでアドバイスがもらえるようになった。そこで、カードを用意して、実際に、他グループの雪像で遊んだり、観察したりして気がついたことを伝える交流を数多く行った。カードでの交流を通して、自分たちの作品をより良くしていこうとする姿が見られた。

⑤ とんきた雪まつり開催！

2月26日に幼稚園の子どもたちや保護者を招待して、「とんきた雪まつり」を開催した。2年生が考えた雪像や滑り台などに、幼稚園児たちも大変満足していた。相手意識を大切にされた雪像作りであったために、「ここは喜んでくれた」「すぐ壊れちゃった」などと自己評価しながら、さらに改善していきながら、幼稚園児とかかわる姿も見られた。また、夕方からの部ではアイスキャンダルに火を灯し、行き交う人の心に美しい情景を映し出すことができた。



5. 研究のまとめ

札幌らしい特色ある学校教育をうけ、本校での教育課程に位置付くことになった「雪」の学習である。この実践で、取り組んだ2年生生活科での「とんきた雪まつり」は、結果として、たいへん成果のあるものとなった。

【成果】

- 低学年なりに、何かを作り上げるにあたり、雪像作りは適している。適度な抵抗感、容易な造形、巨大なものを造ることができる満足感など、低学年でも、ダイナミックな活動ができる。
- 幼小連携という観点からも、雪を仲立とした活動は、互いに楽しむことができ、低学年が幼稚園児の体を支えたり、持ち上げたりできることで積極的にふれあうことができる。
- 仲間と一緒に取り組むことで、雪像やかまくらなどを協働的な造形作業で作ることができることを実感できる。
- この学習での経験が、中学年での「冬の防風林探検」の学習において、冬の植物など理科的な視点を育てていくことにつなげることができる。
- また、高学年では、「雪と市民」「雪と除雪」など社会的な視点から雪をとらえていくことができ、発達段階に応じた学習を展開することができる。

【課題】

- 子どもに相手意識をもたせるために、春から幼稚園児や地域の方々と交流を図ることが大切である。
- 外での言語活動の実施方法については、今回は温室を活用して、カードに記録することができた。場所や天候によっては、別な方法を考える必要もある。

